社会喜劇の悲喜劇的人物

——H. James 作「アメリカ人」と F. S. Fitzgerald 作「偉大なるギャッビー」の主人公について——

栃原　知雄

(I)

「T. S. Eliot が Fitzgerald に，『ギャッビー』は，アメリカ小説が，H. James 以来前へふみ出した第一歩であると書き送った時に，それは何を意味していたのか誰にもわからないようである。しかし，この Eliot の言葉は，同じようなテーマで書かれた James の唯一の小説「アメリカ人」と比較する時，重要な意味をもつように思われる。」"No one seems to know what T. S. Eliot meant when he wrote Fitzgerald that *Gatsby* was the first step forward the American novel had made since Henry James. The statement seems meaningful, however, if we compare *Gatsby* with James's only novel of similar theme, *The American*."(註1) と，Richard Chase は "The American Novel and its Tradition" の中で述べている。筆者の此の論文は此の問題点について考察して行こうとするものである。

H. James 作 "The American" (1877)「アメリカ人」の主人公 Newman と，F. S. Fitzgerald 作 "The Great Gatsby" (1925)「偉大なるギャッビー」の主人公 Gatsby は，悲運の主人公として，アメリカ文学に於ける，云わば，伝説的人物とも云うことができる。アメリカ的性格の持主として美事に描かれている。伝説そのものが，それが演ぜられた社会よりも，はるかに強く作者の想像力を占有していて，此の二つの作品が，その新鮮さと意義とを今日にいたるまで失わないのは，おそらく，作者が利用することのできる「作品資源」"the traditional resources" の存在を充分心得て，それを適切に利用したからだと云えよう。しかも，物語の起源がヨーロッパ伝説の原型に発していようとも，その伝説が二人の作家の手でアメリカ的な考え方にしたがって修正され，根本的にアメリカ的な作品に変られているからである。二つの小説を読みながらこの過程を読みとることは実に興味がある。二つながら，物語の中心を貫くものは romantic な，ほとんど素朴といってよい恋情であるが，それは破滅の歌であるとともに，それなりに，一つの肯定的価値を表現したものと云い得るのである。

アメリカ文学にあらわれたアメリカ的性格の人物をアメリカ文学の成長の歴史とともに研究することは，アメリカ文学研究者にとって興味あることであり，この一つの試みは，国民性の一研究として Constance Rourke によって，"American Humor"(註2) と云うかたちで既に論述がなされている。Rourke も述べているように，「アメリカ人の性格として，ユーモアと無関係な反面，また何らかの意味で，ユーモアの支配を受けない反面は，ほとんどないのである。ユーモアは，ただ単に，折にふれて用いられる手法を脱して，全般的な類型と意図とをきめる原動力として，文学の分野にはいってきた。」"There is scarcely an aspect of the American character to which humor is not related, few which is some sense it has not governed. It has moved into literature, not merely as an occasional touch, but as a force determining large patterns and intention."(註3) のである。更に又，Rourke は同著の "Round Up"「むすび」の章に，こうも云

っている。即ち，「寓話に出るヤンキー，伝説的なクロケットから Henry James の小説にいたるまで，性格——伝説につつまれた性格——はアメリカ人にとっては，常に，大きな題材となった。」"Character has always been the great American subject—character enwrapped in legend, from the Yankee of the fables and fabulous Crockett to the novels of Henry James."(註4)

筆者は，Newman と Gatsby を，小説に於ける技巧の問題と関連しつつ，character enwrapped in legend として，取り扱ってみる積りである。T. S. Eliot も "Great Gatsby" を評して，既に，1925年に「数年来，此の小説ほど，おもしろく又興奮させたものは，私の読んだ英米のどの新小説のうちで他にはない。」と述べている。又，"The American" は，F. W. Dupee も評しているように，"Jame's charcteristic comedy of social observation"(註5) としておもしろいものである。

(II)

先づ，H. James 作 "The American" の主人公 Christopher Newman から考察をはじめる。"The American" は James の初期の作品中でも "The Portrait of a Lady" に次いで，重要な作品であり，James 文学の長所も短所も共によく出ているものとして James 文学の研究に大切と考えられるので，筆者は既に「『アメリカ人』をどのように読むか——初期 H. James のロマン主義と清教主義——」(註6) と題して詳しく論述したので作品そのものの構成と技巧に関してはその方にゆずる。

James は複雑な構成を去け主人公 Newman が，(外的にも内的にも，殊に内部動機を主として) 活動できるように考慮している。人物自身の世界の中で小説を発展させて行く方法を取ろうとしている。Quenitn Anderson が "The American Henry James" の中で "The novelist's clear intention in naming Christopher Newman of *The American* was to refer to a discover of the Old World who hailed from the New World"(註7)と書いているように，此の surname (姓) の Newman (新しい人) と云うのは，甚だ象徴的 (symbolic) であるが，これはヨーロッパと云う旧大陸とはちがった，アメリカと云う新大陸の生んだ新しい型の人間をあらわそうとしていることはすぐ気づくので，作者 James は，小説の中での Newman と云う人物に特別の愛情をもっているようだ。Newman と云う主人公の名前そのものに意義があった。Rourke も述べているように「この小説の単純ではあるが，攻撃的な緊張感は，たえず，国民的な類型の問題に専念した想像力から生れたものである。」"The simple and aggressive stress belonged to an imagination perennially engaged by the problem of the national type."(註8)

James は外型描写と内面描写 (性格描写) の両面から Newman を描き上げるのに，アメリカ人独特の類型を作ろうとしている。此の小説の冒頭で詳細に外型描写をするのに読者は気づくであろう。主人公がルーブル博物館 (the Museum of the Louvre) のサロン・カレー (the Salon Carré の画廊を歩いているとき次のように述べる。「国民のタイプに多少でも敏感な目をもつ人であったら，この素人くさい美術鑑賞家の生れた土地を云い当てることに苦労はしないであろう。そして，そういう人であったら，この紳士が，ある国民のタイプとして理想に近い典型であることにあるユーモラスな快感を覚えるであろう。」"An observer with anything of an age for national types would have had no difficulty in determing the local origin of this undeveloped connoisseur and indeed such an observer might have felt a certain humorous relish of the almost ideal completeness with which he filled out the national mould."(註9)

主人公は「あごは平たく」"flat jaw"，「首は頑丈でドライ」"firm dry neck"，「脊が高く」"long"，「やせていて」"lean"，「筋肉質」"muscular" である。作中で Newman の出身地はあきらかにされていないが，この外型の特徴はあきらかにヤンキーの子孫である。「姿勢と態度

には大様で，どこか，だらしなさがあった。」Newman はありふれた体格をしており，衣服についてもありふれた意識をもっていた。時代は，金鉱殺到時代 (the Period of Gold Rush) である。太平洋沿岸が財政上の成功の場面で，おそらく San Francisco か Virginia City にいたのであろう。Newman は企業心と意志と努力によって巨万の富をつくった中年男で，文化のナイーヴ (naive) な讃美者である。作者は，主人公が次のように考えることを認めている。「彼が此の世に生きる目的は……ただ，かたい材料から財産をどっさりつくりとることであった。財産は大きければ，大きいほどよいのであった。この考え方は彼の視界のすべてに充満して，彼の想像に満足をあたえた。彼は40才になろうとするまで，金の使いかたや，黄金色の流れをそそぎこんだ人生をどのように扱ったらよいのか，ほとんど反省もしてみなかった。」"What he had been placed in the world for was.....simply to gouge a fortune, the bigger the better, out of its hard material. This idea completely filled his horizon and contented his imagination. Upon the uses of money, upon what one might do with a life into which one had succeeded in injecting the golden stream, he had up to the eve of his fortieth year very scanty reflected."(註10)

ベルガード家 (The Bellegarde) のヴァレンティン (Valentin) が次のように云う。

「……しかし，あなたは卑俗な家庭用品を製造して販売しておられるように見うけられますが，それにもかかわらずあなたをみていると心うたれます。——悠然としてくつろいで立ち，多くの高い塀の向こうをまっすぐ眺められる人として，あなたの独自の行き方に，わたくしの心は打たれます。わたくしは，大株主が好きな鉄道会社の汽車で旅行をするように，あなたが，あらゆるところで活動をしておられるようにみえます。あなたを見ていると，わたくしの持ち株がとても貧弱であるように思われます。それなのに，人人は世界はわれわれのものだと思っております。わたくしに欠けているものは，何でしようか。」

".....But you who, as I understand it, have made and sold articles of vulgar household use—you strike me—in a fashion of your own, as a man who stands about at his ease and looks straight over ever so many high walls. I seem to see you move everywhere like a big stockholder on his favorite railroad. You make me feel awfully my want of shares. And yet the world used to be supposed to be ours. What is it I miss?"

これに対する Newman の答はこうである。

「それは，正直な勤労に対する誇りに満ちた意識——人が金でもって買いたがるようなものを，おのが手でこしらえるという意識です。その訳は，それが決定的な手段だからなのです。あなたは，わたくしが造った洗濯用たらい——それは美しいたらいですよ——それについて語られますが，わたくしの汚れのない良心をつくるのは，まさにこのたらいとその美しさではないでしようか。」"It's the proud consciousness of honest toil, of having produced something yourself that somebody has been willing to pay for—since that's the definite measure. Since you speak of my washtubs—which were lovely—isn't it just they and their loveliness that make up my good conscience?"(註11) 他の個所で Newman は周到に考えて次のような言葉をはくところがある。

「最少限度の時間で，最大限度の財産をつくることです。」"My specialty has been to make largest possible fortune in the shortest possible time."(註12) そして，Caroline Gordon も述べている(註13)ように，Henry James の小説中の人物の行動する場所は，Venice, Florence, Rome, London 等外国の土地であるのだが，James の主題は "the impact of America on Europe" で，アメリカ人が出場するまでは何事も起らない。"The American" に於ても，家柄の Claire de Cintré と Valentin も，Christopher Newman と交渉が生れるまでは，乾燥状態でしばられている人間達である。

(Ⅲ)

ベルガード家 (The Bellegarde) の一族が，Newman のために催した盛大な招待会の席上で，Clair de Cintré の婚約を発表しておきながら，一族はその後この婚約を破棄する。Newman が Clair の本心がききたくて，ベルガード家を訪問した時に Clair de Cintré は馬車で旅立とうとしていた。」そして，「あなたを断念致しました。と云う。「母の命令です。」とつけ加えて旅立ってしまう。アメリカ人であるとの理由で拒否され，人人の面前で恥ずかしめられる。家柄にこだわる風習のために（古くさく，しかも，腹の立つ理由によって）婚約を拒否されたのである。それでいて，sophisticated なベルガード家の一族は (Clair と Valentin を除いて）浅ましい程世故に長けてもおれば，商売にも悪がしこく，抜け目のないことにかけては Newman をはるかにしのいでいたのである。Newman は裏切り行為が，自分にむかって蓄積されているのを，あやしむことができなかったのである。それ程 Newman は，innocent でも，単純でもあったのである。Newman は自ら敗北の道をえらんでいる。しかし，果してこれが敗北の道であろうか。Newman はベルガード家の非人間的な罪悪の証拠（ベルガード侯爵殺害の件）をにぎっているのだから，復讐をなし得たのであるが，この証拠を破棄してしまっている。これは Rourke も論じているように「根ぶかいところにある性格の粗雑さが，Newman の寛大な衝動をうながしたのであろう。作者の Newman の性格描写には深刻な諷刺がしみこんでいるが，作者は主人公の Newman を愛している。晩年になっても James は自分の初期にあつかった此の主題に魅せられたと言っているのである。Newman は自分の信じる道義によって自分の人格を守り通すことになる。

James は伝説的人物とも云うべき Newman を中心に一つのロマンスを或は寓話を作り上げている訳だが，それは，低俗な社会の影響を受け易い状態に附随する不便を取り除く雰囲気の中で作り上げている。James が自らつけた序文を読めばわかるように「アメリカ人」は解放された，もつれをとかれた，邪魔ものがとり除かれた経験が描かれているとも云える。他の多くの James が描く主人公や人物と同様，Newman も生活の芸術と呼ばれるものに献身的であって，人生の普通の生き方に生きがいをみいださない。人生のゲームに於て，他の競技者とゲームを行って高点を獲得しようと争わない。従って行うゲームの目的は，他人を打ちまかすことではない。そのゲームの賞金は美しい人間関係である。James にとっては，最高点をとる競技者は，このように美しい人間関係を保持する player のことなのである。そうして，James は低音階で奏される敗北のユーモアを描く。アメリカ人もその例外ではない。Newman も Isabel Archer (“The Pnrtrait of a Lady” の女主人公）と同様，可能性に直面して，自己放棄を意味するような選択をした。自己放棄を不可避にして自分の運命を甘んじて，性格の高貴さを示しているかにみえる。こうして，「アメリカ人」は社会喜劇となる訳だが，James は社会に於ける人間の間に横わる鋭い感覚をその描写にそそぎ込んでいる。Newman は割切れぬ心持でアメリカに帰る。ある日手紙が来た。いよいよ Clair が尼になったことを知る。手紙が着いたのは朝であったが，その日の夕方に，Newman はパリーに向かって出発した。Newman の胸の傷口は，以前と同じ烈しさをもってうずき始めた。長いわびしい旅の間，ずっと，修道院の中で送る Clair の生涯を思いつづけて，それをせめてもの旅の伴侶とした。彼は永久にパリーに住む決意をするのである。decadent aristocrcy に対する純潔の計略を果さない悲喜劇的人物として Newman は意識的な純潔さと心理的な影をあとに残している。

(Ⅳ)

次に「偉大なるギャッビー」について考察する順序となった。

「偉大なるギャッビー」“The Great Gatsby” (1925) を評した Lionel Trilling の言葉「これ程多くの粗野な力が夢に描いたロマンスによって

駆り立てられているのは，この世界においてアメリカ以外にはなく，又小説においては Gatsby 以外にはない。」"To the world it is anomalous in America, as in the novel it is anomalous in Gatsby, that so much raw power should be haunted by envisioned romance." を引用した後で Richard Chase は「『ギャッビー』の魅力はロマンスと粗野な力の写実的描写との奇妙な結合である。」(註14) "The special charm of *Gatsby* rests in its odd combination of romance with realistic picture of raw power. と述べている。此の作品は1925年のものであるが，Fitzgerald の作家としての技巧が頂点に達したもので，前述のように T. S. Eliot が賞讃したのももっともである。「偉大なるギャッビー」の主人公 Jay Gatsby は1920年代の人物で，無一文で西部からニューヨークへ来た男であるが，酒類密売で大金持となった男である。所謂，bootleggar（酒類密売者）である。百万長者となりニューヨークの郊外に大邸宅をかまえて，あけくれ盛大なパーティを催している。その目的は，入江をはさんだ向こう側に住んでいる Daisy の愛をとりもどすことにあった。入隊前 Daisy の愛をかちとっていたのだが，軍隊勤務中，ヨーロッパにいる間に，Daisy は Tom Buchanan と云う名の大金持と結婚としてしまった。それを金の力でとりもどそうとしているのである。金を万能と信じている極めてアメリカ的な男の悲劇である。Fitzgerald は，此の作品で作者自身の二つの面を二人の人物に投影して描いた。失敗の主人公ギャッビーとこの主人公を眺め主人公の物語を常に客観的に物語る友人 Nick Carraway という語り手である。此の作品が小説技巧の点に於て，Fitzgerald の作品中，最上の出来だと云われる一つの大きな理由は，此の Nick Carraway と云う人物を創造設置して客観性の把握を試みたからである。此の人物の設置によって物語はクロノロジカル (chronological) には進められない。物語は，第一章では Nick が Gatsby の隣りに住むようになったところからはじまる。入江の対岸には，Nick の大学時代の友人トムがいて，その妻の Daisy は実は Nick の再従弟（またいとこ）となっている。第二章では Tom の情婦に Gatsby が紹介される。その情婦は灰の谷にあるガレッジの主人 Wilson の妻 Myrtle と云う名の女である。第三章，Gatsby の催した盛大なパーティで主人公 Gatsby の素性や経歴があれこれうわさされる。第四章，Nick は他の人から Gatsby の過去をきいて知る。ここでまた第一次大戦当時の Gatsby と Daisy の関係をも知る。第五章，Nick の家で，Gatsby と Daisy が再会する運びとなる。第六章，Gatsby は Nick に少年時代のことや Daisy とのロマンスのことを詳しく語る。第七章，ニューヨークからの帰途，Gatsby と Daisy とが同乗していた自動車 (Daisy が運転をしていた)が，Tom かと思って駆けよって来た Myrtle を轢き殺す。Nick がその事を知る。第八章，狂気のようになった Myrtle の夫 Wilson が殺しに来るから逃げるように Nick が Gatsby に告げに来る。Gatsby は Wilson に射殺される。第九章，Gatsby の老父が Minnesota から来る。この老父が Nick に見せた古い本の巻末には，Gatsby の少年の日課表が書き込んであった。

"He opened it at the back cover and turned it around for me to see. On the last fly-leaf was printed the word SCHEDULE, and the date September 12, 1906. And underneath:

Rise from bed……6.00 A. M.
Dumbell exercise and well-scaling ……6.15—6.30 "
Study electricity, etc. ……7.15—8.15 "
Work ……8.30—4.30 P. M.
Baseball and sports ……4.30—5.00 "
Practise elocution, poise and how to attain it ……5.00—6.00 "
Study needed inventions …7.00—9.00 "

GENERAL RESOLVES

No washing time at Shafters or 〔a name, indecipherable〕
No more smoking or chewing
Bath every other day
Read one improving book or magazine per week

Save $ 5.00〔crossed out〕$ 3.00 per week
Be better to parents (註15)

「彼は，その本の裏表紙をあけて，私に見えるようにまわしてみせた。巻末の飛びページに，時間割と云う文字と，1906年9月12日と云う日付が記してあった。そしてその下に——

起　床……午前6.00
乾鈴体操，壁攀じ運動……　〃　6.15—6.30
電気学，その他の勉強……　〃　7.15—8.15
仕　事……　〃　8.30—4.30
ベース・ボール，その他のスポーツ
……午後4.30—5.00
雄弁術，平静とその達成法の練習
……　〃　5.00—6.00
必要な発明の工夫……　〃　7.00—9.00

誓

シャフターズや或は〔某所，読み解けない〕にて時間を浪費しない
禁煙，かみ煙草もしない
隔日入浴
毎週一冊良書（或は雑誌）を読む
毎週5ドル〔と書いて横線で消してある〕3ドル〔と訂正〕を貯金する
両親にもっと孝養をつくす　」

(V)

このようにして，「偉大なるギャッビー」の生涯は終る。財産を求めて，不幸にしてそれを手にした酒密売者 (bootleggar)は，Daisy——今は人妻になっている以前の恋人——を求めて行く。だが，それはお伽話のように，白い宮殿に黄金の乙女を見出さず——Gatsby が射殺されて，その葬式に Gatsby の老父が来ている頃は Daisy は夫の Tom とどこかへ旅に出かけてしまっている——Gastby のお伽話は，a happy ending とはならない。Gatsby は社会喜劇の悲喜劇的人物となってしまっている。主人公 Gatsby の悲劇を目撃した後，「東部」を立ち去って，自分の故郷の「中西部」に帰ろうとしていたこの小説の語り手 Nick Carraway が，その最後の晩，浜辺の砂原の上に寝そべって，情緒豊かな感懐にふけるところで，此の小説も終る。此の作品は卓抜した中篇小説である。作者 Fitzgerald は，この小説で，自分の言おうと思うことを緊密な芸術的形式で述べることができたのである。此の小説が成功することができたのは又，途方もなく大金持の酒類密売者の愛と死の物語に真実性が発揮できたのは，重ねて云っておきたいが Gatsby が愛している Daisy の再従弟である Nick Carraway と云う語り手を設置した技巧によるのである。おそらく，此の作品は所謂，ジャズ時代 (the Jazz Age) のアメリカ小説界を代表して後世に残るもので，作者の名は，此の作品と共にアメリカ文学史上に残るであろう。William Troy も "Scott Fitzgerald : The Authority of Failure" (註16) の中で論述しているように，T. S. Eliot の所謂，「客観的相関物」"objective correlative" に類したものを，作者が，はじめて此の作品に至って，発見し，今まで描こうとして果せなかった材料，つまり，「個人的な劣等感と世界に対する幻滅感の混合した感情」"the intermingled feeling of personal insufficiency and disillusionment with the world" をこの作品にまとめることが出来たからである。

此の作品以前のものでは作者自身と主人公が，えてして，一つに融け合う傾向があった。Fitzgerald は，作者自身と主人公を区別しなければならぬ内的原理に欠けている作品を書いていたが，この作品ではこの二者の分離に成功して小説家としての進展をみせている。此の分離によって作者のもつ二面性を，おのおの二人の登場人物に託して小説を書くことができた。観察者として語り手 Nick Carraway を設置し，他の一面，夢にとりつかれた romantic な青年としての特徴を Jay Gatsby に託している。この技法は勿論，Fitzgeerald 以前に，すでに，Joseph Conrad や Henrry James の此の種の技法の高度の完成があった。殊に James には此の技法を用いて書いた見事な諸作品がある。物語の中心に「賢明な，だが同情的な観察者」"the intelligent but sympathetic observer" を設置する手法は，例の Henry James の諸作品の序文で James が何回となく力説した

もので，作品に，簡潔さ (economy) と，緊迫感 (suspense) と，密度 (intensity) とをあたえる。Gatsby の物語りとしてみれば，夢と現実，人生に対する希望条件と人生の実際条件との，みさかいのつかない男の失敗の物語りであり，語り手 Nick の物語りとしてみれば，苦渋に満ちた体験から脱け出して，草原の清い冬の夜に象徴される正気と冷静とをとりもどした世界である。

Nick は故郷の中西部に帰ろうと決心する。去る前に，しておかねばならない一事があったのだ。最後の夜，トランクに荷物を詰め終り，あの巨大な何の意味ももたない空家になった Gatsby の家をもう一度眺めに出かけて行って，浜辺に出て砂原の上に寝そべった。

"Most of the big shore places were closed now and there were hardly any lights except the shadowy, moving glow of a ferryboat across the Sound. And as the moon rose higher the inessential houses began to melt away until gradually I became aware of the old island here that flowered once for Dutch sailors' eyes—a fresh, green breast of the new world. Its vanished tress, the tress that had made away for Gatsbys house, had once pandered in whispers to the last and greatest of all humans; for a transitory enchanted moment men must have held his breath in presence of this continent, compelled into an aesthetic contemplation he neither understood nor desired, face to face for the last time in history with something commensurate of his capacity for wonder." (註17)

「今や海辺の大邸宅は閉されて，海峡をぼんやりした灯が動いているほかには，灯はほとんど見えなかった。そして月が高く上るにつれて，消えてかまわぬ家家の姿は消え，ついに，かって，オランダの水夫達の眼に花のように映じたこの島の古い姿——新世界の初々しい緑の胸——が次第に私の眼に浮んできた。今はなくなったこの地の叢林がギャッビーの邸宅に道を譲った叢林が，かっては，人類の最後の，そして最大の夢を，ささやきながら誘い立っていたのだ。此の大陸を目前にして，人間は，人間の驚嘆する力に釣り合ったものとの史上最後のめぐり合いを経験し，人間が理解も欲求もしない美的瞑想にひきこまれて，恍惚の瞬間に息を呑みこんだに違いない。」

此の箇所は，すでに批評家達によって，その象徴的な意味が指摘されている。そして，この結語は華やかである。Gatsby の生涯と，その死は，その語り手の Nick の心にアメリカそのものの理想的意義を呼び起し，又 Gatsby の理想を追う姿は，「此の大陸を目前にして，人間は，人間の驚嘆する力に釣り合ったものとの史上最後のめぐり合いを経験し，人間が理解も慾求もしない美的瞑想にひきこまれて，恍惚の瞬間に息を呑みこんだに違いない」ひと時を人に思いおこさせるのである。Richard Chase も「『ギャッビー」のこの結語はコンラッド流に多少華やかすぎるところがあるけれども，いたって熱烈で感動的なので，作品全体が，この恍惚の瞑想，この超絶的経験の最後の瞬間に向って，ひたすら，つき進んできたように思われる。」"These concluding lines are so impassioned and impressive, even if a little overopulent in the Conradian manner, that we feel the whole book has been driving toward this final moment of transcendence."(註18) と書いている。

(VI)

Fitzgerald は，若い頃 (Princeton 時代) に，短篇や詩を書いて，作家になろうとしていた。その頃は John Keats や Compton Mackenzie などを愛読していたが，後には，Henry James やその影響を受けた Edith Wharton の作品を愛読していたと云われている。此の論文で，取り扱った二つの作品「アメリカ人」と「偉大なギャッビー」とは，時代と背景を異にしているけれども，テーマや手法の二面からみて甚だ似かよっている。Fitzgerald が James から影響を受けたと云う「実証的検出」を行い得るところは見出せないであろうが，此の二つの作品を熟読してみるなら

ば，Fitzgerald が，無意識的ではなく意識的に James の影響を受けているように考えられる。「アメリカ人」も「偉大なるギャッビー」も，一口に云えば，伝説的とも云われるアメリカ人の主人公の romantic な，素朴さとと云ってもよい恋情を描いている作品である。

「アメリカ人」は，所謂，国際的悲劇として取り扱われたもので，James の自序にもあるように，同国人が他国（フランス）の貴族社会で，欺かれ，裏切られ，痛烈に面目を傷けられるアメリカの主人公の話である。Donald Heiney の表現をかれば，"the psychological analysis of the conflict between decadent aristocracy (France) and virile commercialism (America)"(註19) の物語である。又，Christof Wegelin の表現で云えば，"The contrast and the conflict are between what amounts to the integrity of American idealism and an opportunistic French realism which inevitably strikes the American as corrupt."(註20) の物語である。「偉大なるギャッビー」にも此の種の対比がなされていると思う。これは作者が，意識的に設定したもののように思われる。あの途方もない盛大なギャッビーのパーティに集ってくる人間のグループと，此のグループの人間達と行動を共にするが，因襲的に此らの人間達を軽蔑しているようにみえる人間達，物語の主要人物 Gatsby と Nick は West Egg に住み，Tom Buchanan とその妻 Daisy は East Egg に住んでいる。さらに此の対比の意味を追求して行くと，アメリカの「東部」と「西部」或は「中西部」の対比となってくる。Nick は West Egg をも含めた「東部」に甚だしい嫌悪を感じる Nick にとって，West Egg は East Egg の反対であるどころか，ここも呪わしい東部の一部分なのである。Nick は，かってのアメリカ人の夢を支えていた粗野で純粋な「西部」或は「中西部」へ帰って行くのである。

Gatsby は彼の巨大な家，盛大と云う形容詞では充分でないと思われる程のパーティ，酒類密売から得た莫大な収入，この奇怪な外部の混乱にもかかわらず，ひたすら，今は人妻である昔の恋人の愛を取りもどすことにすべてをかける。富を蓄積したのもこの純粋な目的のためと云うことさえできよう。アメリカ的典型の単純で，ひたむきな性格の男のようである。しかも，女は手に入らない。その女は Tom Buchanan の妻であり，しかも大金持の妻である。このあざむかれたものは，腐敗したものと対抗して，敗北へとたどって行く。

「アメリカ人」の Newman の場合も女（ベルガード家の Claire de Cintré）は Newman を愛している未亡人である。しかも，Newman は Cintré が愛情を感じそうな男性「ほっそりして，背が高く，堂々としてやさしみがあり，貴婦人のようでもあり，天使のようでもある」"tall, slim, imposing, gentle, half *grand dame* and half an angel" 人物に描かれていて，それは，「『典型』と単純性との混合——「鷲」と「鳩」との混合」"a mixture of 'type' and simplicity, of eagle and the dove" を示している。アメリカ的典型の理想型であろう。「アメリカ人」の場合は娘の意志に反して母と兄の反対で結婚解消となる。ベルガード家の堅固な自信の前では富も無力であることがわかる。これも腐敗したものと対抗して，敗北へとたどって行くのである。この二つの小説の情況は大変よく似ている。Newman は結婚を断念する。これは James の小説であって，あくまで敵と同じ低いレベルに落ち込まないのである。自分の道徳と人格を守りぬくのである。「悪」と対決したが，「復讐」をあえてしてまでそれに打ち勝とうとしなかった。

Newman は，正当な手段で大金持となった。Gatsby は，うしろぐらい手段で大金持になった。けれども此の二人の主人公は共通して，純心と個人的な道徳律に関する理想をもっている。二人とも世間のしきたりからでなく，アメリカの古い時代からの夢と牧歌的理想から人生の価値を得ている。

Gatsby は権力と名声を獲ている金権階級に対して攻撃を加えている。しかも，それをあえてしたとき，ロマンスの主人公でもあるが，社会喜劇の悲喜劇的人物になってしまったのである。

Newman も Gatsby も高い社会的地位の相手の弱点を握って復讐しようと思えば，それをなし得たのであるが，寛大で純心な主人公はそれを拒絶したのである。T. S. Eliot が「"The Great Gatsby" はアメリカ小説が Henry James 以来前へ踏み出した第一歩である」と云った時何を意味していたのだろうか。それは，Richard Chase も論述しているように Fitzgerald が「アメリカの伝説を一そうよく利用している」からであろう。そして更に，それは，「悲劇的な無謀さと，人間の記憶に永く止まる鮮かな宿命感」をもっているからであろう。又「神々しい狂気」"divine insanity" をもっていて，その可能性を開き，「それまで誰も演じたことのないドラマにアメリカ人的主人公を出演させたこと」にあるからである。この小説以前に，アメリカの小説には，無謀で宿命を負った伝記的人物は登場してはいるけれども「ギャッビーのように写実的に描出された社会的舞台で，役割を演じた人物は，他にないからである。」此の可能性を開いたと云うことが，此の小説が高くかわれた理由である。

Newman と Gatsby は，人生に対する希望条件と人生のさしだす実際条件との，みさかいのつかぬ男の失敗の物語であろうが，此の夢をいだく純心と無邪気さは原始的なものであり，尊敬に値するものであって，「黄金時代」と同様，今日に於ても消失していないアメリカ人の典型である。これは「全世界に対して唯一の純心な個人である素朴なアダム」でさえある。アメリカのアダムとイヴが悪と対抗することを暗示するものである。このように「アメリカ人」と「偉大なるギャッビー」を読むとき，私達はその現代性を読みとると同時に，その神話性をも読みとることが出来る。殊に，「ギャッビー」は，最近のアメリカ文学には数少い，神秘的なスケールを持つ人物で，人間の願望充足を作品に投影している。「アメリカ人」の主人公 Newman と「偉大なるギャッビー」の主人公ギャッビー，殊に後者は，社会喜劇の悲喜劇的人物となって，ロマンスと粗野な力の写実的描写との奇妙な結合によって魅力をのこしている。

(1962. 4. 29.)

(註1) "The American Novel and Its Tradition" by Richard Chase.
(註2) "American Humor—A Study of the National Character" by Constance Rourke.
(註3) (註2)と同書。
(註4) (註2)と同書。
(註5) "Henry James" by F. W. Dupee.
(註6) 拙稿「アメリカ人」をどのように読むか—初期 H. James のロマン主義と清教主義—関西学院大学「論攷」第7号。
(註7) "The American Henry James" by Quentin Anderson. p. 281.
(註8) (註2)と同書。
(註9) "The American" by Henry James. The Novels and Tales of Henry James. New York Edition Volume II.
(註10) (註9)と同書。
(註11) (註9)と同書。
(註12) (註9)と同書。
(註13) "How to Read a Novel" by Caroline Gordon. p. 122.
(註14) (註1)と同書。
(註15) "The Great Gatsby" by F. Scott Fitzgerald.
(註16) "Scott Fitzgerald: The Anthority of Failure." "Forms of Modern Fiction—Essays collected in honor of Joseph Warren Beach" edited by William Van O'connor.
(註17) (註13)と同書。
(註18) (註1)と同書。
(註19) "Recent American Literature" by Donald Heiney. p. 33.
(註20) "The Image of Europe in Henry James" by Christof Wegelin. p. 38—39.